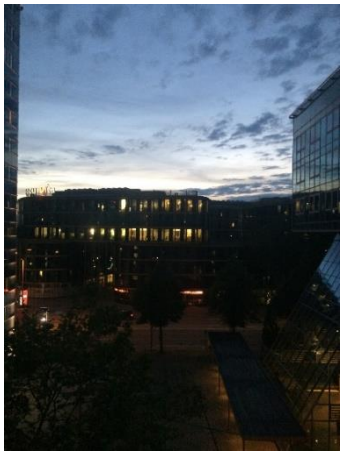
福井大学学術交流協定校への派遣留学（交換留学）　月例報告書（6 月）

留学先：ハンブルク大学

氏名：　片川　絵里奈



6 月 21 日は *Sommersonnenwende*（夏至）で、一年で最も日が長い日でした。写真は、私の住む寮の窓からの眺めで、22:30 頃に撮影されたものです。6 時半ごろには日が昇り、日没が遅いので、一日がとても長く感じられます。気候も適度に涼しく、こんなにも過ごしやすい時期は一年のなかでほんのわずかなので、毎日その喜びを噛みしめながら生活しています。

今月は、第 2 週目に *Pfingsten* という休暇があり、その際に母と友人が日本から遊びに来てくれました。今回は、休暇での様子と、そのときに改めて考えた「ドイツにおける消費」についてお伝えします。

半年ぶりの再会

Pfingsten（聖霊降臨日）は日本ではあまり馴染みのない言葉ですが、クリスマス、イースターと共にキリスト教の三大祝日となっています。そのため大学は 10 日間の連休があったので、母と友人が日本から遊びに来てくれました。二人にとってハンブルクは初めてのドイツ。どこへ行くべきか迷った末、隣町のリューベックへの日帰りと、ハンブルクのカヌーツアーをすることにしました。

リューベックは、私は 3 年前のサマースクールで一度訪れたことがあるので、当時見たお店や教会、塔を見ては懐かしんでいました。なかでも特に懐かしかったのが *NIEDEREGGER* というマジパンのお店でした。マジパンはリューベックが発祥とも言われており、その街で老舗とされている *NIEDEREGGER* では、マジパンだけではなくマジパンのアイスやコーヒー、ケーキなどを楽しむことができます。行く機会がある方は、是非マジパンアイスを食べることをおすすめします。実は私も母もマジパンはそれほど好きではなかったのですが、ここの店のマジパンはとても食べやすく、はまってしまいました。

カヌーツアーでは、外アルスターからカヌーに乗り、内アルスターへと向かい、湖の畔にあるレストランで食事をして帰る、という計 6 時間のツアーでした。これまではジョギングや散歩でアルスターを上から眺めたことはありましたが、湖上からハンブルクを眺めるのは初めてだったので、とても新鮮でした。鳥たちと同じ目線から市庁舎を眺めたときや、湖の中心から吹き上がる噴水の傍を通ったときは、思わず歓声が上がるほどの美しい光景を見ることできました。3 人乗りを 6 時間借りて一人あたり 18€ほどなので、たまの晴天の時には自分の手で舵をとり、舟遊するのも気持ちが良いです。

ドイツのここがステキ！*Lebensmittel*～食料品～

母と友人が最も目を輝かせて見ていたのが、屋外市場の食品たちです。写真の場所は Isemarkt（イーゼマルクト）いう名前の屋外市場で、一年を通して毎週火曜日と金曜日の朝 8 時～14 時に開かれています。ハンブルクで市場といえば、以前も紹介した Fisch Markt（フィッシュ・マルクト）が有名ですが、実はこの Isemarkt、全長が 1 ㎞もあり、屋外市場ではヨーロッパ最大級の規模を誇っています。売られているのは主に食品で、地元の新鮮な野菜や果物がずらりと並んでいて、色々なものに目を奪われてなかなか前に進むことができないほどです。

このときはイチゴが旬だったので、写真のようにパックにたっぷりと入ったイチゴが 2€（約 250 円）で売られていました。普通のスーパーマーケットよりは割高になりますが、少しの値段の差で味が随分と違うので、時間とお金に余裕があるときには足を運んでいます。

上・左の写真は、平飼い農家のお兄さんから卵を買っているところです。同じ農家でも、卵のサイズや肥料、朝採れか否か、によって異なる種類を販売しており、その店のこだわりを感じることができます。

食品といえば、ドイツのスーパーで買い物をすると、よく右のような"Bio"のマークがついている製品を目にします。このマークがついた Bio（オーガニック）製品は、製品がつくられる過程において遺伝子組み換え技術や農薬を使用していなこと、家畜の飼育が適切に行われていること等を保証しており、野菜だけではなくパンや肉、魚、乳製品などの多くの食品に、Bio のものがあります。ある調査によれば、ドイツでは消費者のおよそ 20%が、Bio の商品を購入しているそうです。

ドイツ認定のビオマーク

EU 認定のビオマーク

ドイツは言わずと知れた環境先進国ですが、そこには一人一人が身近なところから環境や自然について考え、日常生活のなかで自ら選択をしているという背景があります。Bio 製品の他にも、エコバックの普及や最小限に抑えた商品の包装、資源のデポジットシステム等が当然のように行われていることにも、社会全体としての環境への意識の強さが表れています。

ドイツで発見した物事、感じた価値観を、できる限り日本で伝えられるように、残りの留学生活でもっともっと、ドイツ社会のことを知りたいと思います。